

	<p><b>エッセイ</b></p> <p><b>トイレさまさま</b></p> <p><b>SCE・Net 持田典秋</b></p>	<p><b>E-33</b></p> <p><b>発行日</b></p> <p><b>2012.6.21</b></p>
---	---	--

【はじめに】

トイレは人間にとって必要欠くべからざる存在である。かならず毎日ニーズがあり、どこに行ってもなくては困るものである。

日本においては、その呼び名が変わってきたようにトイレにもいろいろな変遷があったようだ。私が知っているだけでも「厠」、「雪隠」、「ご不浄」、「便所」、「お手洗い」、「WC」、「トイレ」というように。

「厠」はその名の通り川に直接流し、自然の浄化作用を利用したものであろう。「雪隠」は、ほとんど死語で将棋の「雪隠詰め」くらいしか使われていない。まさにこれは、一番外れの位置で身動きが取れなくなって、王様が負けるという恥ずかしいことであり、トイレもこのような一番外れの位置に置かれ、恥ずかしいものとの意識であったと理解できる。これは以前年配の女性がよく使っていた「ご不浄」とも意識がつながる。

「便所」となると、いかにも名をそのまま示していて、非常にわかりやすい。しかもこの呼名はどうしても和式を思わせる。「お手洗い」は、終わった後の行動を示唆している。しかし、今や呼び名は「トイレ」が主流である。いつ頃からこうなったのであろうか。おそらくこれは洋式便座が普及し始めてからではないかと思う。

トイレトーパーも変化している。戦後から昭和30年代までは、チリ紙と言って灰色のB5サイズほどの四角の紙が、箱などに入れられて置かれていた。終戦直後の紙不足の時は、新聞紙が切りそろえられて使われていた。それが、ロール紙に変わったのは、水洗に切り替わった頃からであろう。そういえば、石油危機の頃はトイレトーパーがなくなったと世間は大騒ぎだった。

このトイレも、世界各地では民族によってずいぶん違いがある。私が海外に行って体験し、見聞したトイレについていくつか述べてみたい。

1. スイス、ドイツ

初めてヨーロッパ（スイス、ドイツ）に出張したのは、40年近くも前のことである。その時感じたのは、美人の女性が居ないと男性用トイレの朝顔の位置が高いこと。


美人が少ないのは、それまで日本では、欧米の女性を見たのは、ほとんど映画くらいで、映画スターなら美人が多いのは当然であるが、それと現実の最初の印象は別であった。しかし、この話題はじっくり検証したいが、本論から外れるのでやめておこう。

一方男性用トイレの高さは、ホテル、空港、駅と言わず何処もそうである。私には、かろうじて届く高さである。彼らは確かに背が高いが、中には我々より低い人もかなりいる。なぜそれなのに、トイレがこんなに高いのであろうか。

彼らを観察し考えた結果わかったのは、背の高さではなく足の長さの違いであるということだった。残念なことに、わかってはいた事だが、我が日本民族の体型の特徴として短足である、という結果にたどり着いたわけである。その後、トイレに行くたびに足の長さの違いを痛感させられた。

ドイツでは、現地事務所の女性社員からこんな小話を聞いた。

ある日本人が、トイレに行ったら"Herren"と書いてあったので「へーれんのか」と、もう一方に行ったら"Dame"と書かれていたので「駄目か」と諦めたという。

確かに当時  のような図は見かけなかった。

[注] : "Herren"は男性、"Dame"は女性。

## 2. トイレのチップ

欧米では、外では必ずトイレ使用料が必要だった。この習慣のない日本人にとって、極めて厄介な感じがした。チップを忘れ、ヨーロッパの空港のトイレで小銭を持ち合わせていないのに気付き、後ろを振り向かず急いで飛び出てきたという知人がいた。別の知人は、同じようにしたら追いかけて払わされたと聞いた。中には、お釣りをくれるところもある。こうなるとチップではなく、使用料である。

日本人向けのバスツアーでは、ガイドが休憩ごとに個々のトイレではいくら払って下さいと、必ずアドバイスしてくれた。至れり尽くせりというべきか。この至れり尽くせりが、ツアー客に何も考えなくても旅行が済ませられるようにし、ツアーの印象を残らなくさせているのかもしれない。海外旅行は、苦勞しても個人旅行に限る。

確かにチップは、トイレを綺麗に保つために払うようなもので、チップの要らない誰も居ないところは、やはり汚かった。しかし、ブルガリアでは使用料は日本円にして 3 円相当と書かれていたところもあった。これで綺麗に保てるなら、喜んで払う。これも、ソフィアのオペラ座で「ルチア」が 30 円で鑑賞できた国の良き昔話か。

## 3. アメリカ

これも初めてアメリカに出張した時のことである。

たった一人の出張だし、言葉にも不安があった。最初の打ち合わせが無事終わって、部屋を出ようとした時"Men's Room"はこちらだからと言われ、その意味がわからず、"Men's Room"には何があるのかとトンチンカンな質問をし、やっとトイレだとわかった。アメリカなら皆"Toilet"と言うものと思い込んでいた私にはショックだった。

#### 4. 中国

初めて北京に行ったのは、1980年代半ば。天津で仕事を済ませ、北京で故宮博物館に行った。中は広く見学には随分時間を要した。そこでトイレに立ち寄った。

男廁と書いてあったので、場所はすぐ理解できた。その時中に入って目を剥いて驚いたのは、20個くらいの個室にドアがまったく無いことである。付いていたドアが壊されてなくなったのではなく、最初から付けていないのである。しかもこちらを向いて座っている。日本ならドアがあり、向こう向きに座っているのが普通である。「小」の方は、横にズラリと並んでいるが、個室からの視線の先にある。用は足せたが、その目が気になって仕方がなかった。さすがに個室に入る勇氣は持ち合わせていなかった。

しかし、急を要する時は、飛び込んで何処に直行すればいいのかすぐわかり、ドアをひとつひとつノックすることはない。ある意味では合理的かも知れないが、如何なものだろうか。

その後、北京を訪れた時に博物館を再訪したが、その時はドアが設けられていた。外国からの観光客も増え、トイレも幾分国際化したのであろう。

#### 5. パキスタン

パキスタンの男性は、「小」も個室で座ってするようだ。ホテルなどを除き、工場などにはいわゆる普通の男性用朝顔はなかった。それはおそらく服装のせいであろう。パキスタン人は、ほぼ全員が膨らんだズボンの民族衣装を着けており、下手をすると汚してしまうおそれがある。そのため、わざわざ個室に入って汚さないように用をたすのであろう。またパンツも特別変わったデザインになっている。私がパキスタンで入院し、着替えがなくなった時に一緒にいたメンバーが買ってきてくれたのだが、それを履いたら立ったままでは用が足せなかった。即、履き替えた。

しばらく滞在したプラントの建設サイトは、イスラマバードから80kmほど離れた田舎だったが、朝窓から外を眺めていると、多くの人たちがいそいそと歩いているのに気づいた。そして必ず木陰に消えた。どうも、殆どの家にトイレがないらしかった。雨が少なく、乾燥しているので、そのまま自然に帰るのであろう。座って用をたす習慣も、ここから来たのだろうか。

あれから20年以上経っているので、今もそのままかどうかは分からない。

ビンラディンが隠れ住んでいたのも、このような所だったのではなかろうか。

#### 6. インドネシア

ジャカルタの公園にあるトイレに入った時、男性用朝顔に細い配管とコックがついていた。これは何かと尋ねたら、用を足したあとコックを開いて水を出し、洗うのだそうだ。インドネシア人が、こんなに清潔好きとは思っても居なかったもので、意外だった。ちなみに何処の製品かと思ってよく見たら、「TOTO」と書かれていた。流石である。

しかし、インドネシアは多くの場所に行ったが、この公園で見ただけで、他の何処のトイレもこうではなかった。となると、なぜこの公園だけ特別なのだろうかとの疑問が残った。

## 7. その他

オーストラリアのモーウェルでは、ホテルの部屋の水洗トイレの水が豪快に流れていて、オーストラリアは大きな国だからちまちましていないなと思ったら、それはバルブが壊れていただけのことであった。

JAL のファーストクラスのトイレからは、外が見えた。スイッチを押すと、窓はすりガラスと透明なガラスが切り替わった。ミーハー精神を発揮し、記念にトイレから見た外の景色を写真に撮っておいた。

韓国ソウルのホテルリッツカールトンのトイレは、韓国製の温水洗浄便座であった。しかし、あくまでウォシュレットもどきであり、技術レベルが違っていた。

### 【終わりに】

温水洗浄便座を見ると日本のトイレに関する技術力は実に素晴らしいと思う。ドアを開けると自動的に蓋が上がり、用を足すと自然に水が流れる。しかも少量の水で回転しながらきちんと洗浄する。座っても、便座は常に暖められていて、冬でも冷たくて身震いするようなことはない。洗浄も快適な温度に設定できる。洗ったあとは温風で乾かしてくれる。特に、長い海外旅行から帰った時のわが家のトイレの居心地良さは計り知れない。

家を改装した時に温水洗浄便座を取り付けたのだが、工事に来ていたペンキ屋が「トイレを借して下さい。」「どうぞ。」のあと中に入ったところ、「わ〜っ！・・・ビックリした」と叫んでいた。急に独りで開いた蓋を見て、驚いて叫んでしまったらしい。

アメリカではテレビでトイレの PR は禁止されていて、十分な PR が出来ないようだが、来日したアメリカ人はほとんどファンになって帰って行き、日本から取り寄せるハリウッドスターもいるらしい。来日した外国人のほしいものの中でも、温水洗浄便座は上位にランクされているようだ。

最新鋭航空機「ボーイング 787」には、温水洗浄便座が取り付けられているという記事が、雑誌に載っていた。軽量化を極限までこだわる航空機に、水を余計に積まなければならない洗浄機付きトイレの取り付けは、論議的的となったようだ。「ボーイング 787」の記事は、ANA が載せている次の紹介パンフレットで見ることができる。その中に、トイレも写っている。[http://www.youtube.com/watch?v=G\\_mN1waur6A](http://www.youtube.com/watch?v=G_mN1waur6A)

今や、日本では温水便座がすでに 6 割を超える普及率を誇り、その勢いはとどまることを知らない。しかし、快適さは非常にエネルギーを消費する。特に不足の懸念されている電気エネルギーが使われる。一節には、全国の温水便座の消費電力は、原発 1 基分に相当するという。この点からもメーカーとして今後の改良目標は、より省エネタイプを目指す

ことになるのではなかろうか。

日本発の技術である快適トイレが、世界を席捲する様になったら素晴らしいことである。

おわり